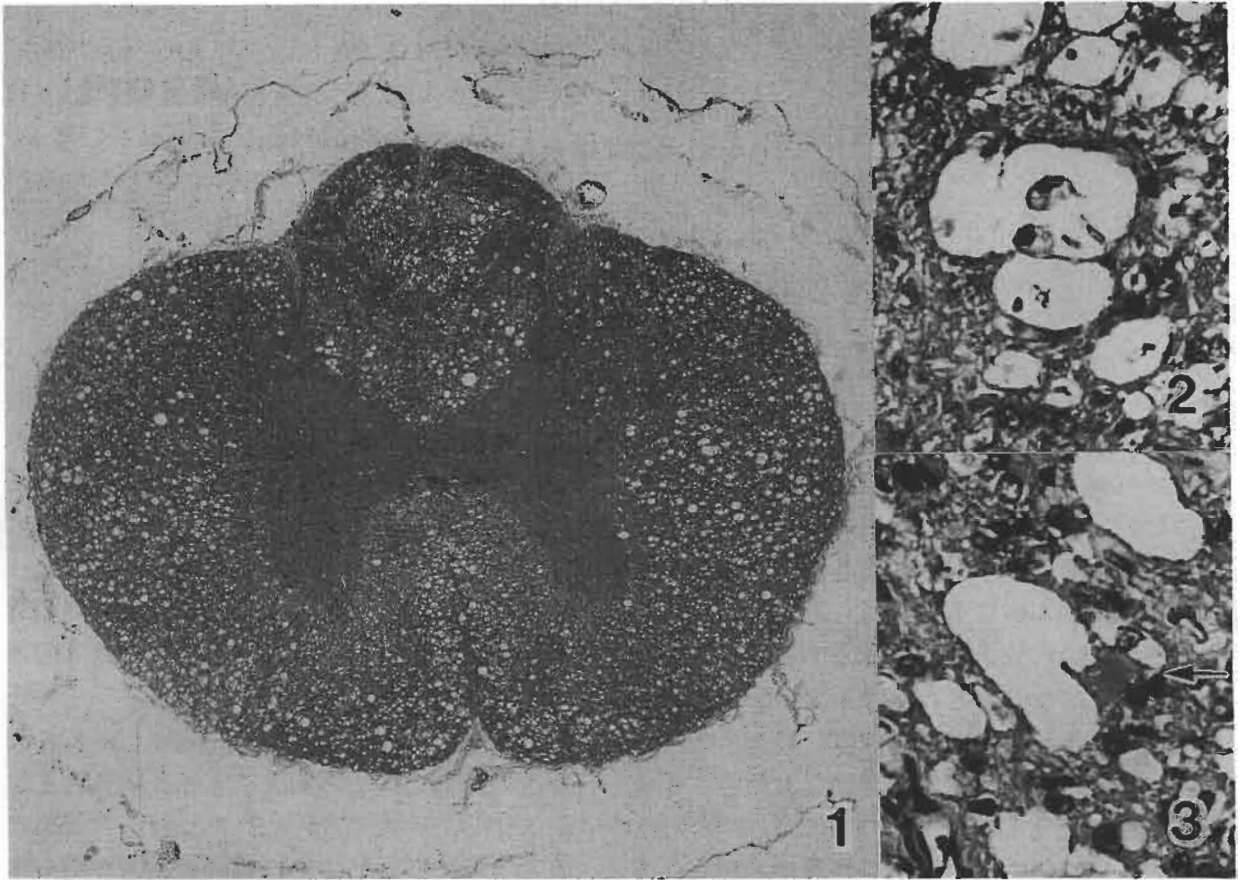


猫のSpinal Myelinopathy

岩手大学農学部家畜病理学教室出題 第33回獣医病理学研修会標本No.599



動物：猫，アメリカンショートヘア一種，雄，4歳。

臨床事項：1987年6月にアメリカから試験的に導入した12頭のうちの1頭。アイソレーター内で長期間個別飼育を行った。1989年12月より，後肢がふらつき，腰痠症状を呈したため原因を検討したが不明であった。他にも同様の症状を呈する猫が発生した。本例は症状が著しく，後肢不随痛覚消失，犬座姿勢を呈し，予後不良と判断して，1990年9月28日放血殺後，剖検した。

剖検所見：皮毛粗剛，後肢筋肉の萎縮，腎臓断面の栗粒大白色点の散発が認められた以外，主要臓器に特に異常は観察されなかった。また，脳脊髄等にも特に肉眼的異常は認められなかった。

組織所見：胸髄は白質全体にわたって，スポンジ様に大小不同の空胞が認められた。(図1，HE染色，×30)。強拡大で観察すると，髄鞘が大小不同に空胞化している像が認められた。軸索の消失，一部膨化，空胞内にマクロファージの浸潤も認められ(図2，HE染色，×500)，また，肥満膠細胞

(図3，HE染色，×500)の増殖が認められた。腰髄でも同様に空胞が認められたが，その程度は胸髄に比べると比較的軽度であった。脊髄神経は一部変性するものもみられたが，特に目立った変化は認められず，また，これらの髄鞘の空胞化は，中脳，橋，頸髄，腰髄でも軽度に認められた。

同病変部はルクソール・ファースト・ブルー染色により白質の背索及び側索に脱髄が高度に観察され，また，ボディアン染色標本により軸索の消失，膨化が観察された。

考察：Sheahanら(1991)は犬のSpinal Myelinopathyを報告している。その病変は今回の猫の病変と類似していたが，病変の分布は犬において腹索，側索が重度であるのに対して，今回の猫では背索，側索が重度の傾向が認められた。犬ではビタミンB₁₂の欠乏によってメチオニン合成作用の低下と，メチオニン欠乏症によるとされている。本例も食餌性のビタミンB₁₂欠乏が疑われたが，原因を確定するまでには至らなかった。

診断：猫のSpinal Myelinopathy。